

弥源太入道殿御消息

弘安元年八月一日 五七歳

一日の御帰路をぼつかなく候ひつる処に御使ひ悦び入って候。御用事の御事共は伯耆殿の御文に書かせて候。

然るに道隆の死して身の舍利となる由の事、是は何とも人知らず用ひまじく候へば兎角申して詮は候はず。但し仏の以前に九十五種の外道ありき。各々是を信じて仏に成ると申す。又皆人も一同に思ひて候ひし程に、仏世に出でさせ給ひて九十五種は皆地獄に墮ちたりと説かせ給ひしかば、五天竺の国王大臣等は仏は所詮なき人なりと申す。又外道の弟子ども、我が師の上を云はれて悪心をかき候。竹杖外道と申す外道の目連尊者を殺せし事是なり。苦得外道と申せし者を仏記して云はく「七日の内に死して食吐鬼と成るべし」と説かせ給ひしかば外道瞋りをなす。七日の内に食吐鬼と成りたりしかば、其れを押し隠して得道の人の御舍利買ふべしと云ひき。其れより外に不思議なる事数を知らず。但し道隆が事は見ぬ事にて候へば如何様に候やらん。

但し弘通するところの説法は共に本権教より起こりて候ひしを、今は教外別伝と申して物にくるひて我と外道の法と云ふか。其の上建長寺は現に眼前に見えて候。日本国の山寺の敵とも謂ひつべき様なれども、事を御威によせぬれば皆人恐れて云はず。是は今生は重く後生は軽き故なり。されば現身に彼の寺の故に亡国すべき事当たりぬ。日蓮は度々知って日本国の道俗の科を申せば、是は今生の禍、後生の福なり。但し道隆の振る舞ひは日本国の道俗知りて候へども、上を畏れてこそ尊み申せ、又内心は皆うとみて候らん。仏法の邪正こそ愚人なれば知らずとも、世間の事は眼前なれば知りぬらん。又一は用ひずとも人の骨の舍利と成る事は易く知れ候事にて候。仏の舍利は火にやけず、水にぬれず、金剛のかなづちにてうてども摧けず。一くだきして見よかし。あらやすし、あらやすし。

建長寺は所領を取られてまどひたる男どもの、入道に成りて四十・五十・六十などの時走り入りて候が、用は之無く、道隆がかげにしてすぎぬるなり。云ふに甲斐なく死ぬれば不思議にて候を、かくして暫くもすぎき。又は日蓮房が存知の法門を人に疎ませんとこそたばかりて候らめ。あまりの事どもなれば誑惑頭はれなんとす。但ししばらくねうじて御覧ぜよ。根露れぬれば枝かれ、源渴けば流れ尽くと申す事あり。恐々謹言。

八月十一日

日蓮花押

弥源太入道殿